

査読論文

直接行動空間の解釈学

——沖縄県東村高江の米軍基地建設に反対する座り込みを事例に——

森 啓輔*

要旨

本論は、社会運動研究の視点から、直接行動の空間における様々な参加者により、いかにして座り込みの空間が形成されているのかを論じることで、座り込みという空間が1つの社会文化的な構築物であることを明らかにするものである。本論の対象は、1996年の日米政府による SACO 合意に端を発する日本国内の米軍再編計画により、集落周辺に米軍基地の新設計画が浮上した沖縄本島北東部に位置する東村高江である。2007年7月から日本政府による一方的な建設開始を受け、住民の中から座り込みによる直接行動が開始され、それに沖縄内外の支援者が加わるようになった。この座り込みの空間は、様々な行為者の言説や表象による網の目を形成し、高江の運動を意味づけている。高江の運動を対象とした先行研究はこれまで、運動敵対者との対立や、国際政治、政治過程などの政治社会的側面が中心に論じられてきた。しかしながら、運動の根幹でありまたその源泉である人々の行為が座り込み空間を形成する意味は、これら考察からは後景化する傾向にあった。ゆえに本論では、社会運動を解釈学的視点から論じる。その中でも運動空間形成に注目しつつ、人々の行為が座り込み空間を形成する多様な言説と表象を、3つの空間概念に文節化しながら、座り込み空間の意味形成がいかに行われているのかを、行為者の意味づけや表象の側面から考察する。座り込みの空間はまず「主体化＝従属化の抗争空間」として生起し、その空間内において運動の正当性が争われる。次に、沖縄の社会運動の歴史的側面を生産する「運動の歴史的象徴的行為の空間」として生起する。最後に、生きる人々の認識と実践が延長された形で表出する「生存（生活）の空間」として生起し、生きることと座り込みが不可分な形で存在していることを明らかにする。

キーワード

社会運動、空間、沖縄、米軍基地、解釈学、運動文化

* 執筆者：森啓輔

所属/職位：一橋大学大学院社会学研究科・博士課程

連絡先：〒186-8601 東京都国立市中2-1

E-mail: sd111020@g.hit-u.ac.jp

0. 本論の目的と対象

本論は、社会運動研究の視点から、座り込みという直接行動を1つの社会文化的な構築物として考察することで、直接行動の参加者により、いかにして座り込みが「空間」として形成されているのかを論じる。本論の対象は沖縄本島北東部に位置する東村高江である。1996年の日米政府による SACO 合意に端を発する日本国内の米軍再編計画により、集落周辺に米軍基地の新設計画が浮上した。2007年7月から日本政府による一方的な建設開始を受け、住民の中から座り込みによる直接行動が開始され、それに沖縄内外の支援者が加わるようになった。この座り込みの空間は、様々な行為者の言説や表象による網の目を形成し高江の運動を意味づけている。高江の運動を対象とした先行研究はこれまで、運動敵対者との対立や、国際政治、政治過程などの政治社会的側面が中心に論じられてきた¹。しかしながら、運動の根幹でありまたその源泉である人々の行為が座り込み空間を形成する意味は、これら考察からは後景化する傾向にあった。ゆえに本論では、人々の行為が座り込み空間を形成する多様な言説と表象を、いくつかの包括的な空間形態に分節化し、座り込み空間の意味形成がいかに行われているのかを、行為者の意味づけや表象の側面から考察する。

0.1. 先行研究の概要と研究方法

0.1.1. 解釈学的視点からの社会運動文化の考察

この目的のために解釈学的視点から社会運動空間とその表象を記述することを試みる。解釈学的視点からの社会運動研究は運動文化を中心的な考察対象としており、文化人類学や歴史学のエスノグラフィーとして実践されたり²、あるいは社会運動論のようにより詳細な理論的前提に基づいた実証研究として研究されてきた³。これら先行研究が運動文化研究において焦点化するのには、運動のプロセスにおける行為者間の「多様な意味」形成である。運動はその基盤に間断なく形成される意味そのものを据えており、これは参加する行為者の変遷や現場の状況によって変化していく。この運動の解釈学的研究の系譜は、個人主義に立脚した合理的行為論モデルに批判的な位置づけから運動を考察している⁴。その理由は、「これら抽象的で、個人化され、脱文脈化された社会運動アクターへの視点は、社会運動における多様な参加者の行為やアイデンティティ、さらには利害関係の核心的な集合的本質に迫ることを妨げる」⁵からである。本論はこれら解釈学的社会運動研究に位置付けられ、行為者「間」レベルで集合的に形作られてきた空間表象の水準を扱うことにより、運動空間がいかにそしてなぜ生起し、行為者により意味付けられているのかを考察する⁶。

0.1.2. 社会運動の運動空間把握のための多層的なスケール

運動空間は近年、米国における Occupy Wall Street 運動や世界各地の民主化運動などの直

接行動の生起により再び注目されつつある。これまで Henri Lefebvre や David Harvey さらには Michel Foucault に至るまでの社会学者や人文学者は「空間」の生産や形成に注目してきた一方で、社会運動研究における空間形成とその文脈生成への考察は概して隅に押しやれており、その分析は非空間的なものが中心となっている⁷。本論では Deborah & Miller が述べるように、運動空間を考察することが対決政治 (Contentious Politics) における様々なイシュー (日常生活空間形成, 集合アイデンティティ形成, 運動組織形成など) を扱うことを可能にするものであり、ゆえに運動を巡る動的な諸力を具体的かつ詳細に記述可能であると考え⁸。

運動空間は一つの「フリー・スペース」⁹である。この概念は、公民権運動やフェミニズム運動の実践の場として「人々が新しい自己の尊厳を学び、より深く積極的に、グループアイデンティティや公的能力, 協同の価値, そして市民的徳を学ぶことを可能とする環境」¹⁰と定義付けられる。これは「プライベートな生活と大規模な公的機関のあいだに存在し、人々が厳然と、自立しながら目的を持って行動できる」¹¹空間である。またフリー・スペースは「現実には常に複雑で、推移し、かつダイナミック」¹²であり「運動の対抗文化の基盤」¹³でもある。さらにこの行為の空間は一つの空間領有の形態であり、行為者による空間の生産に依存しながら、象徴的で自己同一的な空間を再生産していくものでもある¹⁴。ゆえに運動空間は、公共圏として分有される公的なものと親密圏の間に形成される、間公私的空間として見ることができる。

このように生起してくる運動空間を記述すると同時に、座り込み空間が諸力により主体化 = 従属化の力の効果する場であることを分析するには、David Harvey の空間論の3類型が有効である。Harvey は空間を記述する際の理論枠組みとして「絶対的・相対的・関係的」(時)空間について検討している¹⁵。これら類型は、特定の時空間を考察する際の様々な空間認識の多層性を表している。様々な(権)力の編成における時空間スケールの多層性を前提とすることにより、多様なアクターが運動空間をそれぞれの時空間スケールにより形成するプロセスを考察することが可能になる。

Harvey の空間論における1つめの「絶対的」空間は、時間軸を含まない「ニュートンとデカルトの空間であり、通常あらかじめ存在する空間として、また規格化された計量が可能で計算もできる不動の格子として表象」されており、「世界を支配する者の視点でながめるとき、(…)原則としてはあらゆる不明確さや曖昧さが取りはらわれ、人間による計算が隅々まで浸透」するような空間である¹⁶。2つめの「相対的」空間は、測定する基準と観察者の立ち位置によって空間認識が異なり、空間と時間が切り離せない形で存在すると定義付けられる。これは空間把握を「異なる空間的・時間的枠組み」の比較へと拡張していく、アインシュタインと非ユークリッド幾何学の空間である¹⁷。そして3つめ「関係的」空間は、ライプニッツの神学的空間のように、空間の生成自体が時間に埋め込まれている空間であり、「外からの影響が時間をおして特定のプロセスや物事のなかに内在化される」空間である¹⁸。これら空間の3類型を用いることにより、空間形成を担う多様な力のスケールを分節化しながら座り込み空間を構成して

いくことが可能である。つまり、地域社会の出来事をナショナルやグローバルな枠組みから切り離すことなく、それぞれのレベルで作動する力を対象として考察することが可能となる¹⁹。上記3つの空間概念を援用しながら本論では、座り込みの空間を(1)国家の絶対的空間管理の力が働く「主体化=従属化の抗争空間」、(2)様々な参加者や歴史の往来により構築される収斂点としての「運動の歴史的象徴的行為の空間」、そして(3)そこに生きる人々の認識と実践が延長された形で表出する「生存(生活)の空間」として考察する。これら3つの空間は諸力が編成される空間レベル(グローバル・ナショナル・リージョナル・ローカル)の差異に基づいており、特に前述の運動文化の考察は、後者の2つの空間に接合されつつ展開される。

本論では、座り込みという直接行動の空間が、(権)力に対して対抗的に形成される側面のみならず、「生存」とは何かと絶えず問い直す場所として構築され、それが「対抗文化」として効果していることを明らかにし、社会運動空間とその表象を考察する。この「対抗文化」は必ずしもその字義通り、敵対者と直接対峙するような緊張関係を作り出すのみではない。むしろ敵対者を巻き込んでいたり、そこから逸れていたり、また行為者が自身を回復したりするような、相対的自律性を含みこんだ生の形式を実践する基盤である。これは、座り込み現場が一時的な構築物であるとしても、それが長期にわたり継続的に生起し、さらには生活と密着したものだからこそ現出したものであるからに他ならない。また本論は運動全体を十分に表象可能なものではなく、社会運動を一つの分析概念として用いるものであり、本論の視座は筆者の運動現場における2007年からの断続的なフィールドワーク経験の時空間に依存している²⁰。この認識を通して、社会運動研究における認識的な視座の複数性を確保し、さらなる研究の積み重ねにより運動とそれをめぐる社会構造の一層豊かな記述へと寄与したい。

0.2. 全体の構成

筆者は第1章で、座り込みの生起の過程を論じる。第2章では、座り込み空間の特質について述べ、第3章ではそれぞれの空間形成について論じる。

1. 座り込みの生起と空間の発生

1.1. 米軍再編と基地地政学

東村高江における座り込み空間の発生は2007年7月に遡る。冷戦以降の米軍の世界的再編は、軍事力の近代化と新たな仮想敵の決定というプロセスを経ながら、グローバル・スケールの空間において展開されていく²¹。ヨーロッパ冷戦が終結した後も、東アジアでは国家間勢力関係の変化に伴い、サンフランシスコ講和条約の内部に既に「埋め込まれて」いた国境問題と冷戦は継続し、潜在化していた諸問題が現代において表面化することとなる²²。このような背景のもと、1995年に起きた米海兵隊の兵士による沖縄の小学生レイプ事件の発生とそれに対す

る広範な抗議以降、沖縄の反基地運動が「第3の波」として高揚することになる²³。他方で日米政府がこの趨勢を利用する形で「沖縄県民の負担軽減」というスローガンのもと、1996年のSACO最終合意を基点としながら、ロードマップのもとに再編計画が提出される²⁴。しかし計画の根幹は老朽化した基地施設の更新であり、人口が密集した中南部から北部地域の過疎地域への基地機能「移転」であり、SACO報告でも述べられているように「日米同盟関係を強化する」²⁵ために遂行された計画であった。辺野古は其中でも大規模な海上基地の建設計画地として浮上することになる。東村高江においても、米軍再編の一環として海兵隊のジャングル戦闘訓練施設である北部訓練場の「過半」返還が計画される。しかしこれには、返還区域にあるヘリコプター着陸帯（以下ヘリパッドと記す）を残存地域に移設することが条件であった。これらを総合的に見ると、再編計画は沖縄本島北部における海兵隊の一大訓練拠点化計画であることが明らかになる²⁶。

1.2. 北部訓練場と名護市辺野古および東村高江の新基地建設問題の浮上

1996年のSACO最終報告の段階では、この残存地域に移設予定のヘリパッドの数と場所は明らかにされていなかった。実際のヘリパッド数と建設予定地が明らかになったのは、2006年2月の日米合同委員会の直後であり²⁷、高江区民は新聞紙上で具体的な建設計画を知ることとなる。建設ヘリパッド数は7カ所から6カ所に変更されていたものの、建設予定地は、高江区に近接し、かつ希少生物が多く生息した森林地帯に計画されていた（図1）。辺野古では、当時すでに新基地建設とそれに反対する海上行動が継続的に行われており、県内外でも周知のこととなっていた。高江住民による建設に関する説明の要求にもかかわらず、事実上沖縄県と東村当局により建設は容認されたとして、那覇防衛施設局（現沖縄防衛局、以下防衛局と記す）は既成事実のために現地説明会を開催し、過去2回に渡り建設反対決議を採択してきた高江区に対し説明責任を果たさないまま建設開始を宣言した²⁸。かくして民主的とは言えない形骸化した手続きの後に、2007年7月3日よりヘリパッド建設が開始されることになった。これが契機となって、到底納得できない住民の中で座り込みによる直接行動で阻止を決める人々が現れることになる²⁹。それから建設予定地に続く数カ所のゲート前で、座り込みによる非暴力直接行動が開始される³⁰。座り込み空間はこのようにして形成されていった。



図1 返還後の北部訓練場と新設ヘリパッドの位置

[<http://helipad-verybad.org/modules/d3blog/details.php?bid=38&cid=5>]
2014年5月1日取得。

2. 座り込み空間の3つの特質

座り込みに参加する住民は、主として小さな子供をもつ若い家族で構成されている。支援に訪れる人々の年齢層は老若男女様々だが、長期的に参加可能なのは退職者や高齢者、および学生や自営業を営む人たちである。組織的な基盤については、歴史学者の阿部小涼の辺野古との比較が有益である。辺野古の現場では「辺野古命を守る会」と「ヘリ基地反対協」、そして「平和市民連絡会」という3つの組織とネットワークが座り込みの日常的な運営を支えていた。他方高江では「ヘリパッドいらない」住民の会をはじめ、「平和運動センター³¹、統一連³²、沖縄戦跡の平和ガイド活動を行う平和ネットワーク、奥間川流域保護基金、有機無農薬農家の組織などが支援者として恒常的に訪れて」いる³³。しかしながら、そうした「組織に代表されない数多くの個人の参加が見られる」ことも、高江の座り込みを特徴付けるものである³⁴。これらの個人には、アーティストや旅人などが多く含まれている。

それでは前述したように、座り込みの空間を3つに分節化し考察してみる。一つめの「主体化=従属化の抗争空間」は、座り込みにおける主体構築の政治的空間のことである。現場に座り込むことは、自発的にしる結果的にそうなったにしる、まず防衛局と対峙することを意味する。そこに介入していくことは、国家による「反対派」という主体化と、自己による「抵抗者」としての攪乱がせめぎ合う磁場に、自らを投げ入れるということである。「反対派」というラベリングは、座り込み当事者も無意識に使用していることが少なくないが、このラベリング自体がすでに、国家がそれに対国家的（あるいは反国家的）なものをネガティブに措定したものである。さらにこの「反対派」というラベリングは、マス・メディアの二元論的な解釈によりより強固に反復される³⁵。それゆえに、抵抗するものが「反対派」というラベリングにより一度主体化=従属化された後は、パレーシア主体として生きることを余儀なくされ、その中で自身の行為の正当性と国家のそのの不当性を明らかにしなければならない。

二つめの「運動の歴史的象徴的行為の空間」は、座り込みという行為が生産する象徴的效果である。高江の座り込みは原則として、監視行動と非暴力直接行動により成り立つ。座り込みをしながら工事車両が到来することを待つ。しかしながら待つことは静止と同義ではなく、日々の反復により再生産されるものであり、**sit-in**ではなくむしろ **sitting-in** と動的な呼称を用いることが適切である。座り込みの場には住民や支援者が作ったオブジェや看板が展示され、そして訪問客や支援者などから寄せられた沢山のポスターや旗などがところ狭しと飾られる。これらは座り込みの場をシンボリックな空間にしていだけでなく、そこに集う人々の関係性そのものとして現前することになる。さらに重要なことは、「座り込む」という行為自体が、政治的・経済的・司法的なパイプを持たざる人々が自己の身体を動員して行うことであり、これこそが、沖縄における運動史の記憶を浮かび上がらせ、現代において歴史を再構成するのである。

三つめの「生存（生活）の空間」は、座り込み空間がもつスペクタクルな性格の正反対に位置するものである。住民にとって座り込みの目的とは第一に、生活する空間を軍事化から守ることである。ゆえにこの空間はまず、住民や支援者の普段の日常生活の延長として現出する。しかしながら座り込みが長期化すると、座り込みが生活内部に折れ込んでくることに伴いながら、生活そのものと座り込みの境界が不分明になりはじめる。座り込み空間と住民の生活空間の緊張関係が高まるにつれ、生活空間から座り込み空間を刷新していこうという実践が生じる。このように生存（生活）の空間は、生きることそのものと分かちがたく結びついている。3つの空間は、重層的に座り込み現場に現れるものであり、それぞれが「弁証法的な緊張感の中」³⁶に保たれている。以下ではこれら空間性の定義を用いつつ、座り込みの空間がどのように形成されているかをそれぞれ考察する。

3. 座り込み空間の解釈学

3.1. 主体化＝従属化の抗争空間—国家による主体化とその攪乱

3.1.1. 二元論的対立の構築

ゲート前の座り込み空間は、住民側と防衛局側の対峙する場となる。防衛局が建設工事にやって来ると、ゲート前は物々しい雰囲気になる。その場には、作業服と安全帽を着用し、肩に付けた腕章の番号で呼びあう防衛局員、建設を入札した県内や地元の建設業者、住民と支援者、「違法行為」を取りしめる警察官がアクターとして存在する。さらに、防衛局員と住民らが持つビデオカメラやデジタルカメラ、携帯電話がその場の人びとの視線と聴覚に重なり合っている。情報が何かしらの回路で事前に提供されている場合には、テレビや新聞記者などのマス・メディアがその場取材することになる。それらの(ディス)コミュニケーションは、ゲート前をどのように緊迫した状況にするのだろうか。

運動に関する情報は、今日においては運動当事者が持つさまざまなコミュニケーション・ツールを通して得ることができる。しかし多くの場合、当事者以外の第三者が運動についての情報を取得可能なのはマス・メディア報道からである。マス・メディア報道は、高江の座り込みを多くの人びとに伝える機能を果たしている一方、問題の当事者を賛成／反対の二元論で報道する傾向にある。すなわち国家の計画に「賛成」か「反対」か、という線引きを解釈の基本に据える。ヘリパッド建設問題の当事者さえもその図式に乗っ取って言説を生産する傾向がある。そう述べるならば、即座に「問題の争点がそうだから、それに賛成か、反対かという表現は当然である」という反論に出くわすだろう。しかし安易な二元論的解釈は、この分断線をもたらす原因を問うことを困難にし、対立を当事者間の争いに還元してしまう。マス・メディアが再生産する言説内における二元論は、国家—反国家という二元論的言説において、なぜ国家の暴力があたかも無い／かったものとして言説化されるのか、という問題に深く関わってい

る³⁷。つまり「賛成／反対」という「地元」の有権者の人口動態分析へと視点を固定することで、そもそもその構図を根源的に作り出し維持する国家権力や資本、そして暴力への分析を回避可能にするのである。このような状況において「中立」を標榜する客観的立場は、すでに国民国家の認識に囚われている。国民国家が主権を持つ現代においては、人々は国民として生まれ、その瞬間に潜在的に敵対する他の国家との敵対関係にある。言い換えれば、人々は生まれた瞬間に偏ったものとして主体化されているのであり³⁸、国家政策に反対することは非国民という主体化＝従属化を不可避的に伴う。

このように、防衛局が到来するゲート前においては、二元論的な解釈に基づくまなざしがその場を形成する。しかしそのまなざしは同時に、酒井隆史がマーティン・ルーサー・キング・Jr. を引用して述べたような「敵対することによる問題の争点化」³⁹という契機も内包している。酒井が概念化する敵対性 (antagonism) は、これを暴力から分離 (Kritik) することにより生まれる。敵対性を形成し、対立することによる緊張関係を象徴的に非暴力直接行動の戦略に組み込むことで、今まで不可視だった関係性／分断線をあらわにする公民権運動の実践である。阿波根昌鴻が伊江島土地闘争の際に「乞食になったのではなく、武力によって乞食を強いられているのであります」⁴⁰と述べたことは、まさに不可視だった対立関係を炙り出す実践だった。ゆえにゲート前の対立は、絶え間ないまなざしが幾重にも折り重なった場として生起する。ここで人々は自己を主体化し、同時に他者により主体化される。これら権力関係は、現場のミクロなレベルにおいてどのように効果しているのだろうか。

3.1.2. 制服・対立・消耗

ドキュメンタリー監督の比嘉真人による現場のルポタージュでは⁴¹、対立する防衛局側と住民側のゲート前の出来事が、高江の幻想的な朝日や切り立った崖、やぎに餌をやる老人や子供たちの遊び場、といった穏やかな場面と相互に現れており、このコントラストがヘリコプターの凄まじい騒音や、防衛局側と住民側の対立場面をより一層際立たせている。防衛局がヘリパッド建設開始を表明した2007年7月3日早朝、防衛局は高江の住民が寝ている間にゲートを設置し、7月16日夜半から翌17日未明にかけて多数の車両により建設資材、重機を建設予定地に搬入する。これを住民は阻止する。公務にもかかわらず、早朝や夜半にかけて建設を強行する防衛局のやり方のため、住民の座り込みは24時間体制となる。

その後、2007年8月(N1テント前)には、大規模な防衛局の動員が行われた。道路脇にレンタカーが縦列駐車されて、ゲート前は物々しい雰囲気にも包まれる。20人以上の防衛局の作業員が薄いブルーの作業着を着て安全帽を被り、肩には黄色い腕章をつけてゲート前に集合する。作業員は、整列し上司の命令をまっている。さらに、防衛局に雇われて24時間体制でゲート前を見張っている警備員が背後から見つめる。防衛省の公募に入札した建設業者も、ゲートの設置や撤去作業のために数名その場にいる。防衛局員が大勢でやってくる時は、派遣会社

に雇われた作業員が大勢同行することがある。かれらの大半は、日給で雇用されている急場づくりの作業員である。そのような状況下にいた若い男性作業員の姿を、住民のBさんは、このように述べている。

防衛局がリレーして砂袋を入れるときがあったんですけど、そのとき私も何回かいて、ぱっと自分の目の前の防衛施設局〔側の作業員—補足筆者〕の顔みたら、20代そこそこの男の子だったわけ。こっちに私たちがいて、後ろには防衛施設局の責任者がいて、「やれー！早くなんたらせー！」って言っていて、そしたらその子、脚見たらガタガタ震えているわけ。もう、ガタガタって震えている。もう本当に、修羅場っていうか、前代未聞のね。本当に立っているのが精一杯、上司の命令を受けて、私たちの阻止にも阻まれて、もう、ね、両方にね⁴²。

Bさんの指摘は、対立関係の中に埋没しがちな防衛局組織内の上下関係を浮き彫りにしている。Bさんの言葉は、住民と防衛局の対立とは異なる、組織内の階層性を浮かび上がらせながら、同時に現場で対峙せざるを得ないお互いが、沖縄に住む末端の人間同士であることを語っている。

現場に来る国側の作業員は、ごく希な例外を除いて、男性が多数を占める。国側に雇われた作業員を含めて、ほとんどが男性というジェンダー構成は、現場にマスキュリンな力の行使を容易に許すような空間を造り出す。住民と支援者の側は、時期によって様々なジェンダー構成である。住民側の服装規定はなく、組織形態もネットワークを基盤にしているため決して強固であるとはいえない。住民側が建設理由を問いつめると、防衛局に雇われた地元の建設員や作業員は「本音は反対である」という定型句を繰り返しながら作業を継続する。他方、防衛局員の返答は、基本的に防衛省や防衛局の上官がメディア報道で述べる「北部訓練場過半の返還に協力をお願いします」の反復である。それは組織的一体性を妨げないようにする振る舞いであり、制服で統一された身体性を言語領域においても貫徹するためである。言い換えれば、言葉の行為遂行性の貫徹が目的であり、身体はその命令系統の媒介的機能を果たす。末端に位置する防衛局員の身体の主体化＝従属化が、巨大な行政組織の命令系統を成立させ、防衛局員の行動や言動に儀礼的な要素を与える。前述したように非暴力直接行動により対立を構築することは、争点を激化する効果をもたらす。しかし他方で、その関係を構築するアクターは近接した敵手との過剰な相互行為により被傷し消耗する。一日対峙するだけで、末端の人間達は住民側も防衛局側もくたくたになる。住民側にはその消耗の上に更に国との不均衡な力関係が働いて、精神的にも疲弊する。国側の人材は半永久的に交代可能であり、アクセス可能な資源の不均衡も防衛局側は常に戦略の一つとしているのである。

3.1.3. カメラと主体化—時間の空間化

現場において(ビデオ)カメラを持つということは、目撃者として再現可能な映像を記録可能である、という点で特権的である。一方で住民側カメラが、現場の様子を捉え建設作業の不当性を析出し、建設業者の暴力を抑えるための力として作動している時、その視線とは逆の方向から、局員が住民側を同じくカメラで撮影する。これは作業を終えた後に局員で次の対策を行い、司法を用い運動を封じ込めるための証拠づくり(裁判のプロセスにおいて、原告の防衛局側で映像が使用されたことにより明らかになった)のためである。カメラの視線をまなざしの権力性として考察する時、これは防衛局側の組織構造に対して固有の効果もたらす。それは、住民側の行為を捉えるためのカメラが、同時に局員の職務遂行の度合いを判定するために効果していることである。ゆえにカメラによる監視は二重の意味で双方を束縛している。つまり一方で局員の行動は、現場に出来ない上層部の設計した計画通りに遂行されることが求められる。他方でカメラは、現場の住民側の行動を補足し主体化=従属化というメカニズムを発動させる。映像技術は人間の眼の延長として、物理的身体と行為を結びつけるために使用される。これにより、身体と行為が法言語によっても補足可能になり、映像技術により主体化された人びとは、司法に絡みとられる「主体」として生起する⁴³。

このように物理的身体をカメラにより対象化し、それを裁判資料として用いるという手法は、概して科学実験室的な実践である⁴⁴。記録した映像の中から「工事の妨害」という一つの物語を構築しようとする姿勢は、座り込みを開始せざるを得なかった住民の動機や行為の意味、さらには新基地建設計画が持つ想定されうるリスクを熟慮することを矮小化し、住民側の物語を抹消していく。極めて社会工学的な技術による身体の補足と、それを正当化する知の枠組みの双方が適合することにより、座り込みが開始されるまでの歴史性を、裁判を通して書き換えようと試みること。これは物理的領域における圧倒のみならず、知の領域においても座り込み空間を書き換えようとする国の意志=眼⁴⁵として読み取れよう。しかしながら James C. Scott が述べるように、国家テクノクラートの計画は非常に単純化した図式を用いた遠隔操作によって進められるために、現地における象徴的關係や文化を含み混んだ複雑な關係性を捉えることができない。ゆえにこの技術と知の融合は、Harvey が述べたところの「絶対的空間」⁴⁶、つまり物理的に補足可能であり、操作可能な対象のみで構成される空間のレベルに焦点を当てながら作動する。司法による直接行動の排除と建設計画の遂行は、このレベルの技術を動員しながら行われるのであり、だからこそ物理的な証拠としての映像を作り出すためのカメラが、現場における物理的布置の証左として重要な働きを担うのである。

ここに支配の意志が貫徹しているという点で、国家はあらゆる統計を駆使しながら自らの視覚を再構成していく。視覚は時間を空間化することで対象との「距離」を生成する。歴史学者の酒井直樹は、人類学者 Johannes Fabian が人類学的記述の内部に存在するこの「距離」を批判し西洋とその他(West and the Rest)という二元論を脱構築する際に⁴⁷、この機制を時間

の二層性として捉えていることに注意を促す。

人類学者は原住民や仲介者に対して開かれているのでなければ、経験的実証性を主張する情報を獲得することはできないのである。相手にアドレスし、相手のアドレスに応答する開かれた姿勢がなければ、商取り引きをすることから、言語を学ぶこと、原住民と性的悦楽を享受することまで全てが不可能になってしまうだろう。

ところが、人類学的な知が総合され編集されると、原住民や仲介者に対しての相互交渉は否認され、彼らとの共在性は跡形もなく消し在られる⁴⁸。

酒井が述べるように、技術を通して主体化された「主体」は、現場にある行為者の意味論が否定的に排除されることで生成され、時間の「空間化」をとおしながら司法界において争われる「主体」と化す。この新たな「主体」の解釈をめくり、座り込みの現場とは異なるもう一つの法廷という現場が登場する⁴⁹。「主体化＝従属化の抗争空間」として座り込み空間は、このようにして現場での主体化と法廷での「主体化」という二重の主体化が争われる空間なのである。

3.2. 運動の歴史的象徴的行為の空間—沖縄の反基地闘争の改変と継続

3.2.1. 「ヘリパッドいらない」住民の会結成

前述の国家行政と住民の主体化＝従属化の抗争空間は、建設資材の搬入などが特定の時期に集中的に行われるため、365日を通して行われる座り込みの一部分である。むしろ反復により再生産される「運動の歴史的象徴的行為の空間」が、座り込み空間形成の基盤となっている。それでは座り込みはどのようにしてこのような空間形成に至ったのであろうか。

住民が手探りの座り込みを行っているうちに、次第に外から支援者が集まり、座り込みの当番制が始まった。さらに座り込み開始から2ヶ月が過ぎようとする2007年8月24日、住民はそれより前の2006年4月26日に結成されていた組織である通称「ブロッコリーの森を守る会」を併存させながら、よりヘリパッド反対運動に専念するために『「ヘリパッド」いらない住民の会』として自らを組織化する。住民の会は、結成アピールをこのように綴っている。

戦後62年、今なお米軍の占領下にあるような沖縄。

全県各地いたるところで今なお米軍の横暴にされされ続ける沖縄。

私たちはこの長い苦難の歴史を勇気と情熱で抗い続けた県民の力に学びながら、ヘリパッド建設に反対し、県民運動に発展させ、建設を阻止するまでがんばりぬく決意です。

どうぞ私たちに力を貸してください。そして共にごがんばりましょう⁵⁰。

住民の会はこの宣言において、戦後60年余り継続してきた反基地闘争の伝統に自らの座り込みを重ね合わせ、運動を県民運動にまで拡大しながら建設を阻止するものとして表明している。座り込みという運動のレパトリーは、1950年代の米軍による土地強制接収に反対する闘争と土地闘争にはじまり、60年代の昆布土地闘争、70年代の国頭村安田における米軍実弾射撃訓練場建設反対闘争⁵¹や金武湾闘争⁵²、80年代の国頭村安波におけるハリヤー・パッド建設反対闘争と恩納村都市型ゲリラ施設建設反対闘争、そして90年代の辺野古反基地建設運動と高江の座り込みまで、反基地闘争において非暴力直接行動を表現し実践する戦略として重要な位置を占めている。それゆえに、座り込みという言葉と行為は、沖縄の現在においては過去の運動史を想起させるシンボルとして生起する。高江住民の座り込みはこのアピールにおいて、沖縄の反基地闘争の一つとして「歴史化」したと言ってよい⁵³。座り込みはもともと、あらゆる効果的なチャンネル（政治、経済、司法）を持たない人々が、そこに一時的ではあれど対抗的な空間を作り出し、自らの存在を表明する手段としてあった。

同時に興味深いのは、高江の運動の特徴的な現れである。従来の沖縄の反基地闘争の中心的潮流であった民族主義的側面や市民運動的側面のみならず、さらに広い文脈でのフレーミングを確立している側面である。座り込み空間は国道の脇に点在し、周りは北部訓練場の深い緑に覆われている。ゲート前の立て看板に注目してみると、従来の運動のシンボリックなイメージ（「運動」や「闘争」など）に重層的に被さるように緑を基調としたものが溢れている。例えば、ゲート前には以下のようなことが記された立て看板がある（図2）。



図2 ゲート前の看板
(筆者撮影, 2010年3月4日.)

「No War」「森は大切な資源」「ヘリパッド反対・ヘリ基地反対協,」「ヘリパッド建設やめろ・統一連」「これ以上の騒音いらない・高江区」「ヘリパッドをなくそう」「ヘリパッドより肩パッド」「ヘリパッドなんていらねえ」「ダメ, 絶対」「あなたの愛を山原に!」「ようこそ東村高江へ!」「VIVA 生」「水を守ろう」「人間は自然の一部」「No Helipad, But Heritage」「モリヲ, マモレ」

これらモノの多くは、一方で政党や労組がしばしば赤や黄色といった原色で看板を作成しているのとは対照的に、周辺の森の木々と調和するようなアースカラーが用いられている。さらに、漢字詰めや直裁な物言いでの表現というよりは、遠回しに、あるいはコンテクストに置かれて、はじめて理解できる言葉として描かれている⁵⁴。これらが「高江らしさ」を形作る記号

として効果している。これは、従来の運動で使用されてきた言葉を書き換え、あらたな社会運動の界を切り開くという意味で示唆的である。

この表象の重要な根拠の一つとして、座り込みの自然保護運動の側面が挙げられる。軍事占領された東村高江周辺の森林は、軍事基地に提供された国有林野として存在していたため、逆説的にも資本主義による乱伐を免れ、沖縄本島で最も古い森林地帯を包含しており、さらには絶滅危惧種や希少生物が数多く生息している。防衛局は、沖縄県環境アセスメント条例には、高江の建設予定ヘリパッドは「ヘリポートではない」としてアセスメント条例を退け、代わりに自主アセスメント調査を1998—2000年と2002—2004年の2回にわたって行った⁵⁵。このため、環境アセスメントに沖縄県の行政機関が介入する術が事実上閉じられてしまった。そのため基地新設の環境破壊を危惧した国際自然保護連合や世界自然保護基金などの国際環境保護団体などが、1990年代後半から建設中止を訴え続けてきた⁵⁶。これら自然保護運動による環境保護の訴えは、高江の座り込み空間の主要な表象として定着し、ノグチゲラやヤンバルクイナなどの絶滅危惧種や希少生物をはじめとした様々な生命体が看板上で描かれている。

3.2.2. やんばるの過去の運動との政治経済地理的連続性と断絶

沖縄本島北部地域は通称、やんばると呼ばれているが、東村高江が位置する北部東海岸はとりわけ県庁所在地の那覇から離れた「奥地」である。この緑豊かな地域には、水資源生産のための重要な森林地帯が存在しているが、他方で1956年のプライス勧告後に広大な海兵隊基地群が建設された。1957年に公式使用が開始された北部訓練場もこれら海兵隊基地群の一つであり、ジャングル戦闘訓練施設として使用されてきた。軍事と資本の構造に板挟みになりながらも、新たな軍事基地建設により自らの生存が危機に晒された時、人々は直接行動により軍事化を拒否してきた。また軍事地理的構造から見ると、沖縄本島北部東海岸は基地の新設・更新という構造的問題を抱えてきた。しかし、運動発生の時空間や社会構造が異なることからそのプロセスは様々である。前述した国頭村安田と安波における2つの闘争はいずれも、北部訓練場に隣接した東海岸の集落の生活基盤を脅かそうとしたことが発端となっていた。同時に重要なのは、これら闘争は村や区の行政組織を中心として展開されていたことである。この点を比較してみると、高江のヘリパッド建設工事は、国・県・村レベルにおいては事実上承認され、かつ区の中でも農家が大半のため、座り込みのために日々の仕事を犠牲にすることが難しい。さらには、建設予定地の高江区と東村の中心地が隔たっており、ヘリパッド新設の直接的影響を南西部の他の集落が余り受けけないという点も、村ぐるみの運動を困難にした要因であると思われる。ゆえに高江の座り込みは、外からの支援者と共に座り込みを継続する方法を採用することになる。さらに前述の二つの闘争は、主に入会権や土地の所有権、新基地建設に伴う騒音公害を巡るものであったが、高江の運動は入会権に代表される土地の権利が争点となっていないため、より広範な運動基盤の共通項を設定する必要があった。

阿部小涼はこれについて「むしろ、私的領有権を根拠としない抵抗運動という点で、高江の直接行動を評価することが出来る」⁵⁷と述べている。それは詰まるところ、高江の座り込み空間を物象化せずに、関係性における一つの支配と抵抗の諸力の収斂した場として見るということである。私的領有権を根拠としないことは根本的な意味合いを持つ。なぜなら運動の目的が私的領有の達成でないことは、翻れば目的が脱軍事化という普遍的価値を持つということであり、沖縄のみならず日本本土や他の時空間においても、高江と同じような状況が発生する可能性を示唆しているからである⁵⁸。だからこそ、そのような潜在性に敵対し、闘争／逃走線を作り出す必要性が喚起されるのであり、それが他の地域の運動との連帯に開かれていく。さらにこれは、沖縄戦の体験を経て「誰も殺したくないし、殺されたくない」⁵⁹という地点から、国民国家や資本への適合とは異なる形で、新たな公的領有や共同性を模索しようという試みであるとも言える。

3.3. 生存（生活）の空間—生きることと運動することの共起

3.3.1. 生きられる内部と外部の認識の多元性

3つめの生存（生活）の空間は、身体を媒介とした主観により認識そして感覚される世界である⁶⁰。そこには、当然ながら資本主義社会において生存するための「計算の精神」⁶¹を内面化した合理的行為モデルの人間としてのみならず、非合理的行為を統合した形の実践的人間として人々は生きている。運動をめぐる合理的行為の組織化への過度な注目は、かえって等身大の現象学的レベルから抽象的な合理主体を抽出する還元主義に陥ってしまう。この隘路をくぐり抜けるためには、近代的人間主体認識を相対化する必要性に迫られる。隣接領域の文化人類学は、西洋文明の系譜の相対化を中心的課題として扱ってきた。例えば Philippe Descola は、文化人類学において議論されてきた自然／社会という分割を、内面性（interiority）と身体性（physicality）の関係性として捉えなおしつつ、これらを4つの認識論に類型化し論じている⁶²。この中で、主観から見た対象の身体性は異なるが、内面性な連続性を認知する認識のあり方が「アニミズム」として概念化されている。人類学のフィールドワークのように「近代」と明白に比較可能なものとして、運動における生きられた空間認識を考察することはできない。しかし反省的な近代の主体の多元的現れの一つとして、運動の表象の中にそれが埋め込まれていることは強調されてよい。なぜならば、この認識が、住民の会の人々にとっての運動と生活認識の結節点だからである。

アニミズム的認識においては、前述したように人間が見た対象の身体性こそは異なるものの、内部に個体の身体的相違を超えた連続性を見いだす。だからこそ、自らと自然の生命の連続性を感覚することが可能であり、そのような連関において生きることが高江で生きることの大きな要素となっている。これは住民の会を構成する人々の生業が、伝統木工工芸や森の中でのカフェ経営、有機農家などであることとも関連している。これら労働形態は、人間に不可避

的に自然と関わることを余儀なくさせるし、産業資本主義が自然を人間化することで支配し、他方で人間が自然化（動物化）されるという局面から⁶³、人間と自然を双方向的に支配しない労働形態を模索していると言える。とはいえども、このような自然観は生態学的自然認識とも類似しており、とりわけ人間が環境に埋め込まれている存在であり、その体系の循環の中で生きているというリフレクシヴな認識とも共通項が見いだせる⁶⁴。とりわけ有機農業は、可能な限りこのような人間・自然個体の内的連続性を保持するなかで、生態系＝エコロジーという双方を包含する概念を構築し、それに配慮した農業を実践する。生態学に裏打ちされた有機農業は、土地利用や私的領有権の境界を横断する思考をとおして、自然との内的連続性を科学的かつ想像的に実践しているのである。この内的連続性は、高江の住民の会のフライヤーの挿絵にも現れている。川面に照らされる木漏れ日のきらめき、透き通った川のなかを泳ぐ魚を凝視する少年、その周りを覆うイタジイの森。このような光景はまさに、前述した外的差異と内的連続性という認識論を中心にもつ、アニミズム的自然観ということがここで可能なのである（図3）。内的連続性は、それぞれの身体が「触れる」という表現としても置き換え可能である。この「触れる」という経験は、近代において支配的な感覚である「視覚」を相対化する契機にもなる。



図3 「ヘリパッドいらない」住民の会

「Voice of Takae」2014挿入画。[<https://dl.dropboxusercontent.com/u/713656/> 高江関係 /voice of Takae 2014.1.31改訂版 .pdf] 2014年5月1日取得。

3.3.2. 運動現場の被傷性とそこからの回復としての生活の中心化

このような視点からみれば、マス・メディアが注目するようなスペクタクル政治としての運動現場は、一種の疎外された人間同士の出会いとして現出してしまうことが分かる。とりわけ、現場の緊張感が高まってくると、人間同士の内的連続性さえも不在のものとして帰結する。この断絶が、地球規模の構造的差別⁶⁵という問題の集積点の一つとして現れるとしても、敵手と対立する空間に自らを投企するということは、対立する双方の人間にとって大きな傷を負うものとしてある。とりわけ高江住民や支援者にとって、2011年頭から大挙して到来するようになった防衛局および建設業者との24時間体制の対峙は、多大な負担となって現れた。そのような現場に直面した後の2013年、高江の女たちは自らのミニコミを創刊することとなる。それは『新月新聞』と名付けられ、それぞれが紙面上に思い思いに自らのことを書き記している（図4）。新聞の発行は、「日常生活」があるためにいつも座り込み現場にいるわけにはいなかった女たち——その多くには小さな子どもをもつ——が、「せっかく高江まで足をはこんでくださったのに会えなかったかた」や「会えたけどゆっくり話す時間がとれなかったかた」へ「お手紙のようなおしゃべりのようなものを作ることにした」⁶⁶ことがきっかけであった。書き手

は、それぞれの表現で、生活や運動のことを書き記している。その中では例えば、以下のようなことがしたためられている。

高江にはいろいろな人がやってきます。ヘリパッドの工事をする業者さん。工事の施工主の沖縄防衛局の職員。ヘリパッド建設阻止のために来る人。とにかく高江の現場を見に来る人。

私たちは高江に訪れるすべての人と話し合いたい。争ったり戦ったりして、いらだちにくしみを募らせ合うのではなくわかり合いたい⁶⁷。

生活を持続させるなかで運動を継続するということは、翻れば運動が生活そのものを構成する要素に変化するということである。長期にわたって巨大な力と対峙することは身心の疲弊を伴うものであり、しかしだからこそ、運動という場に「楽しさ」が含み込まれることが喫緊の課題として要請される。その中で豊かに生き切ることを他者と共有しようという試みが、生活を取り戻そうとすること、換言すれば切迫する運動が生活に折り重なってくることに對して、生活の側からもう一度立て直していくことに帰結する。これは決して懐古主義ではなく、日々刻々と変化していく現在に立ち向かう一つの技術としてある。座り込む女たちのこの表現は、長期化した運動の中で生活と運動がもはや分割できない地点に到達していることとも不可分である⁶⁸。言い換えるならば、限りある生を有意義に実践することが、座り込みを有意義に生きることと接近し、焦点化されるのである。内的連続性と触覚の表現は、『新月新聞』においても散りばめられている。



図4 新月新聞0号, 2013表紙

例えば4月～5月初め頃には、ノグチゲラのドラミングが、5月初め頃から夏が終わる頃まで、アカショウビンの鳴き声が早朝の森に響きます。それらのすべては、私の体にも心にも美しく響きわたるので、毎日毎日の事なのに全くあきる事なく、言葉では言い表せない幸福感で満たされます⁶⁹。

ヤンバルで夜空を見上げ月の神秘に触れたら、自然に何かに感謝し願いたくなります⁷⁰。

うりずんの風が吹くこの季節、毎年、秋冬やさいの種取りをします。なかでも種そのものが食べられるハーブ類の種取りは楽しい！種取りしながら思いついたレシピなど紹介します⁷¹。

[——引用部の傍点は全て筆者による]

これら音（波）、光線、食事などは、触覚し内に取り込むという意味において非人間アクターとの内的連続あるいは結合を表現している。こうして見ると、生活の中に含まれる諸々の行為がいかに生／性の内的連続性と深く関わっているのかが浮かび上がる。住民の会の女たちの、高江での日々の暮らしにおける内的連続性の感性が座り込みという可視的現象の根幹にあるからこそ、座り込み空間における被傷性を生活の基盤から回復する実践がなされるのである。

3.3.3. 音／波と関係的空間の複合的連結

また、高江の座り込み空間で忘れてはならないのは音楽とミュージシャンの存在である。座り込みの場で奏でられるインプロヴァイゼーションに止まらず、音楽イベントは高江の運動を特徴付けるレパートリーであり続けている。しかし、これを単なる運動の1レパートリーとして片付けてはならない。なぜなら音楽という時間芸術が構築する空間が時間的限定性において条件付けられており、空間の生起が時間というプロセスに内在化しているからである。これはHarveyが述べたところの「関係的空間」そのものである。音楽が運動のレパートリーであるということはゆえに、関係的空間が様々な場所で生起していることを示している。

高江の運動においては楽器が演奏できる人々が少なくなく、かつ住民にもプロ・ミュージシャンが存在することから、音楽で運動を盛り上げていこうとする機運が早くからあった。辺野古のPeace Music Festa!から活動してきたカクマクシャカとDuty Free Shoppをはじめとした沖縄のインディーズ・ミュージシャンから、UAや七尾旅人、クラムボンの原田郁子などの日本のオルタナティブ・メジャー・シーンに至るまで、高江の運動表象は数々の音楽ジャンルを通して成されてきた。「座ろうか」と「ロッカーズ」の混声語として、住民の会で結成された「スワロッカーズ」は、「沖縄民謡、オキナワン・ロックというよりは、そこに折り重なるようにルーツロック、レゲエ、ジャズなどのジャンルに傾倒した1960年代生まれの世代がこの空気を支えて」⁷²おり、まさにスワロッカーズそのものが、現場を訪れる様々な人々により形成された座り込み空間のアナロジーとして存在している。ある特定の音楽ジャンルがリスナーの親密圏を形成するのと同じ構造において、高江について／において演奏される音楽は「高江系」とでも名付けることのできる領域を形成している。沖縄のみならず日本中で開催されてきた高江の現状を伝えるイベントには、様々なミュージシャンが参加し、音の空間を作り上げてきている。それら1つ1つは小さいものかもしれないが、「関係的空間」として経験された高江は、リスナーの親密圏において緩やかな連結を複合的に生み出している。この連結は親密圏における個々人の関係性により成り立つものであり、インプロヴァイゼーションに基づいたある種の「ゆるさ」が備わっている。

音楽はまた、詩としての言語と、波動としての楽曲を接合させた技術である⁷³。音の波動に

よる皮膚の振動は、音楽の時間的制約により永続した体験とはならない。しかしそれゆえに、音楽の体験は身体の時空間的な経験として知覚／感覚される。これは、詩のレベルにおいて言語領域のコミュニケーションを実現し、楽曲のレベルにおいて音の波動と身体との内的連続性を効果する。これら関係的空間の接続は強力なものではないが、個々人に立脚しているからこそ多様な表象を生成し、シンプルなフレーミングでは表現できない複雑な世界観を形成していくのである。

4. 結論 空間を作り出すことの根本的な意味の考察へ

これまで見てきたように、座り込み空間は(1)主体化=従属化の抗争空間、(2)運動の歴史的象徴的行為の空間、そして(3)生存(生活)の空間が重層的に形成されることで成立している。直接行動の一形態である座り込み空間は、意味の多様性が、目的合理的行為のみならず様々な行為の形態を伴いながら形成されている。これは運動する当事者が、それぞれの生を実践していることの現れであり、それぞれの諸行為の分有的形式として座り込みが生じたからに他ならない。そこでは様々なスケールの空間形成の諸力が、幾重にも交差しながら行為者を主体化=従属化する。同時に行行為者は運動文化の網の目を張り巡らせながら、国家スケールの力に対抗する空間を作り出す。対立の中で、運動の行為者は現在と過去の歴史を接合し、現在を歴史化していく。高江の座り込みは、過去の近隣地域の反基地運動と比較すると、私的領有権に基づかないという点において共同体の共通フレーミングを得る条件が整っていなかった。しかしそのことが逆説的に、公的な共同性への可能性という普遍的な視座を開いていくことになる。また運動が長期化し、現場の対立により運動行為者の被傷性が増大していく時、生活空間に運動空間が折れ込んでくるのがイシューとなった。このような事態に直面するなかで、住民の生活実践、とりわけ女たちによる運動の生活空間化が試みられ、そこでは対立と共に内的連続性という認識が生産され、それは住民の会の発行物の表象や音楽という実践と切り離せないものとして浮かび上がるのである。

座り込むということは、一時的な自律空間⁷⁴として生起し、敵手と対峙する場であると同時に、退避する場、被傷性から身を守り、集団的に回復する場でもある。そのような多元的な意味を生成する空間は、様々な社会的境界や分断を可視化すると同時に、運動が置かれている特定の時空間の構造的諸矛盾をさらけ出していく⁷⁵。また運動の行為者は、運動現場で被傷した自己の傷を、他者と接続する回路として構築し直す⁷⁶。これは他方で失敗に終わるかもしれない。しかしながらそのプロセスそのものが生きることと不可分であり、それぞれの行為者の生存の選択であることを、強調せずにはいられない。空間を作り出すこと。公共圏が軒並み「パブリック」の意味を横領する国権主導的で非民主主義的な現在を生きる我々にとって、公私の間にある空間を作り直し、再び人々の側からその境界線を引き直すことの意味を、今一度根底

から突き付けてくるのが、高江で行われている座り込みという直接行動なのである。

謝辞

査読者の方々に有益なコメントを頂いた。ここに深く感謝したい。

註

- 1 池尾靖志, 「高江のヘリパッド建設反対運動から見える日米安保体制の矛盾」『社会システム研究』25: 79-96, 2012年, 拙稿, 「沖縄社会運動を「聴く」ことによる多元的ナショナリズム批判へ向けて—沖縄県東村高江の米軍ヘリパッド建設に反対する座り込みを事例に」『沖縄文化研究』39: 159-208, 2013年, および「占領に抗う—東村高江のヘリパッド建設反対闘争」田仲康博編, 『占領者のまなざし—沖縄／米国／日本の戦後』せりか書房, pp.182-206, 2013年.
- 2 阿部小涼, 「繰り返し変わる—沖縄における直接行動の現在進行形」『政策科学・国際関係論集』13: 61-90, 2011年, 阿部「占拠するアート／技巧（アート）する占拠」『Vol.』3: 155-160, 以文社, 2008年, Graeber, David, *Direct Action: An Ethnography*, AK Press, 2009.
- 3 Melucci, Alberto, *Challenging Codes: Collective Action in the Information Age*, Cambridge Univ. Press, 1996, 野宮大志郎編著, 『社会運動と文化』ミネルヴァ書房, 2002年, 西城戸誠, 『抗いの条件—社会運動の文化論的アプローチ』人文書院, 2008年.
- 4 これは Steve M., Buechler が述べるように, 社会運動研究のパラダイムが構造的力, 組織的ダイナミクス, そして政治的対決を強調してきたため, そこから社会運動の「文化」へと対象が回帰した動きと重なっている (Buechler, Steven M., *Understanding Social Movements: Theories from the Classical Era to the Present*, Paradigm Press, p.181, 2011.).
- 5 Ibid., p.185.
- 6 空間表象の水準で運動を考察することの根拠として, 行為者個人レベルの記述は, 現在裁判係争中の運動当事者のプライバシーを著しく侵害する恐れがあるためである. そのため本論では運動の行為者が集合的に作り出した空間と, 空間の表象を主として論じていきたい.
- 7 Martin, Deborah G. and Byron Miller, "Space and Contentious Politics", *Mobilization*, 8 (2): 143-156: 143-144, 2003, Sbicca, Joshua and Robert Todd Perdue, "Protest Through Presence: Spatial Citizenship and Identity Formation in Contestations of Neoliberal Crises", *Social Movement Studies*, 13 (3): 309-27: 312, 2014.
- 8 Ibid.
- 9 Evans, Sara and Harry Boyte, *Free Spaces*, University of Chicago Press, pp.16-17, 1986.
- 10 Ibid., p.17.
- 11 Ibid.
- 12 Ibid., p.19.

- 13 Ibid., pp.19-20.
- 14 Ripoll, Fabrice, "S'appropriation de l'espace: ou contester son appropriation? Une vue des mouvements sociaux contemporains," *Noroi*, 195: 29-42, 2011. (=遠城明雄訳, 「空間を領有すること…あるいはその領有に異議を申し立てること?—現代社会運動の一視点」『空間・社会・地理思想』14: 69-81, 2011年.)
- 15 Harvey, David, *Spaces of Neoliberalization: Towards a Theory of Uneven Geographical Development*, Franz Steiner Verlag, pp.93-115, 2005. (=本橋哲也訳, 『ネオリベラリズムとは何か』青土社, pp.149-189, 2007年.)
- 16 Ibid., p.94=153.
- 17 Ibid., pp.94-96=154-6.
- 18 Ibid., p(p),96=156-157.
- 19 社会運動とスケールに関する議論, とりわけ沖縄の社会運動との関わりについては山崎孝史『改訂版 政治・空間・場所—「政治の地理学」に向けて』ナカニシヤ出版, 2013年を参照されたい.
- 20 筆者は2007年末より現在まで, 断続的に座り込みのフィールドワークを行ってきた. 特に2007年から2011年にかけて集中的に行なわれたものを基盤に本論は構成されている.
- 21 Klare, Michael, *Rogue States And Nuclear Outlaws: America's Search For A New Foreign Policy*, Farrar, Straus & Giroux, 1995. (=南雲和夫・中村雄二訳, 『冷戦後の米軍事戦略—新たな敵を求めて』かや書房, 1998年.) Garson, Joseph, Bruce Birchard, *The Sun Never Sets: Confronting the Network of Foreign U.S. Military Bases*, South End Press, 1991. (=佐藤昌一郎訳, 『ザ・サン・ネバー・セツツ—世界を覆う米軍基地』新日本出版社, 1994年.) Lutz, Catherine (ed.), *The Bases of Empire: The Global Struggle against U.S. Military Posts*, Pluto Press, 2009. 林博史, 『米軍基地の歴史—世界ネットワークの形成と展開』吉川弘文館, 2012年.
- 22 原喜美恵, 『サンフランシスコ講和条約の盲点—アジア太平洋地域の冷戦と「戦後未解決の諸問題」』溪水社, 2005年.
- 23 Tanji, Miyume, *Myth, Pretest and Struggle in Okinawa*, Routledge, 2006, p.5. 1950年代土地闘争が「第1の波」, 1960年代復帰運動が「第2の波」として定義付けられる. 「第3の波」における沖縄からの集団的怒りの構造化過程で形成された男根主義的な「少女」への欲望に対する確な批判は, 田崎真奈美, 『「少女」と政治: 沖縄における米兵による強姦事件を事例に』『沖縄と島々をめぐる討議』2011年度明治大学大学院内 GP 〈他大学大学院との研究交流プログラム〉報告書, pp.65-85, 2011年を参照されたい.
- 24 外務省ホームページ「SACO 最終報告 (仮訳)」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/usa/hosho/saco.html>. 英語本文は <http://www.mofa.go.jp/region/n-america/us/security/96sac01.html> を

参照されたい。（2014年4月10日取得）

- 25 同上.
- 26 鳥山淳, 「1950年代の軍用地接収—伊江島と伊佐浜そして辺野古」『歴史評論』, 712, 2009年 : 35-49: 47.
- 27 沖縄県庁知事公室基地対策課, 『沖縄の米軍基地』 p.182, 2013年.
- 28 那覇防衛施設局, 「北部訓練場ヘリコプター着陸帯移設事業（仮称）に伴う環境影響評価図書案の説明会概要」情報公開資料, 2006年（請求者：土屋武信 2010年3月23日）.
- 29 同時に, 基地建設が国策だからこそ抵抗してもどうしようもない, という諦めも高江区内には存在している. そのため基地建設による負担増大に伴う補償金を求めようと条件闘争を行う区民も存在する.
- 30 「やんばる東村 高江の現状」, 2007年7月2日 [<http://takae.ti-da.net/e1634570.html>]. 2014年7月30日取得]. 2日の当日は, 高江, 東村, 辺野古, 県内外さまざまな場所から30-40名が集まった.
- 31 自治労, 国公労, 高教組, 沖教組, マスコミ労協, 全港湾, など社民党・社会党系列の平和運動組織からなる.
- 32 安保廃棄・くらしと民主主義を守る沖縄県統一行動連絡会議, 日本平和委員会, 民医連, 医療生協, 県労連, 民青同盟, 新婦人, 民商などの共産党系組織による平和運動母体などからなる.
- 33 阿部上掲, p.71, 2011年.
- 34 同上.
- 35 地域紙である琉球新報では, 2007年1月頃から「反対派」という言葉を用い, 沖縄タイムスは座り込みが始まる7月3日から「反対派」という言葉を用いている.
- 36 Harvey, op. cit., p.98=160.
- 37 Pandey, Gyanendra, *Routine Violence: Nations Fragments Histories*, Stanford University Press, 2005.
- 38 Foucault Michel, *Il faut défendre la société: Cours au Collège de France 1975-1976*, Gallimard/ Seuil: Paris, 1997. (=石田英敬・小野正嗣訳『社会は防衛しなければならない』筑摩書房, p.53, 2007年.)
- 39 酒井隆史, 『暴力の哲学』河出書房新社, pp.38-46. 2004年.
- 40 阿波根昌鴻, 『米軍と農民—沖縄県伊江島』岩波書店, pp.126-127, 1973年.
- 41 比嘉真人, 『やんばるからのメッセージ—沖縄県東村高江の記録』Oracion, 2008年.
- 42 住民Bさん, 女性, 主婦, 2008年10月25日聞き取り.
- 43 そもそも近代国民国家の原理そのものが, 西川長夫が述べるように, 同一性により構築されている. ゆえに同一性を確証する諸技術は, 国家構成の根幹を担う技術であると言える. (西川長夫, 『(新植民地主義論) —グローバル時代の植民地主義を問う』平凡社, 2006年.)

- 44 Latour, Bruno, *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers through Society*, Harvard University Press, 1993. (=川崎勝・高田紀代志訳, 『科学が作られているとき: 人類学的考察』産業図書, 1999年.)
- 45 Scott, James C., *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*, Yale University Press, 1998.
- 46 本稿 P.97を参照されたい.
- 47 Fabian, Johannes, *Time and the Other: How Anthropology Makes Its Object*, Columbia University Press, 2002.
- 48 酒井直樹, 「共感の共同体と空想の実践系」『現代思想』29 (9): 213-237: 225, 2001年.
- 49 高江の裁判のように, 司法が, 権力側のために利用される訴訟の形態は, SLAPP 訴訟 (Strategic Lawsuit against Public Participation= 公的参加を妨げるための戦略的訴訟) と呼ばれる. (松井茂樹, 『表現の自由と名誉毀損』有斐閣, pp.403-429, 2013年.) 北米では SLAPP 訴訟の頻発から, 反 SLAPP 法が制定されている州も少なくないが, 日本においては 反 SLAPP 法に相当する法体系は未だ確立されておらず, 結果としてフリー・ジャーナリストなどの個人から住民運動まで, 行政や企業に SLAPP 訴訟により訴えられるケースが, 問題としてほとんど認識されていない (松井前掲, p.425.).
- 50 「ヘリパッドいらない」住民の会ブログ (2007年8月24日) [<http://takae.ti-da.net/e1714613.html>, 2014年7月30日取得].
- 51 比嘉康文, 『鳥たちが村を救った』同時代社, 2001年.
- 52 上原こずえ, 「民衆の『生存』思想から『権利』を問う—施政権返還後の金武湾・反 CTS 裁判をめぐって」『沖縄文化研究』39: 127-158, 2013年.
- 53 運動の「歴史化」に関しては拙稿 (上掲「占領に抗う—東村高江のヘリパッド建設反対闘争」) を参照されたい.
- 54 阿部上掲, p.160, 2008年.
- 55 琉球新報2007年3月14日朝刊.
- 56 WWF ジャパン, 「米軍北部訓練場のヘリパッド建設中止を求める声明文 2007年6月14日」 WWF ジャパンホームページ, [<http://www.wwf.or.jp/news/press/2007/p07061401.htm>, 2009年1月28日取得].
- 57 阿部上掲, p.69, 2011年.
- 58 目下京都府京丹後市に建設が計画されている米軍通信施設問題がその嚆矢の出来事である (斉藤光政, 「なぜ今, 133番目の米軍基地なのか—京丹後に建設される『最前線の眼』」『世界』850: 109-116, 2013年.).
- 59 屋嘉比取, 『沖縄戦, 米軍占領史を学びなおす—記憶をいかに継承するか』世織書房, 2009年.
- 60 そして Harvey が述べた3つの空間類型 (絶対的, 相対的, 関係的) においては, 関係的空間

に相当するものである。

- 61 Bourdieu, Pierre, *Algérie 60 : structures économiques et structures temporelles*, Éditions de Minuit, 1977. (= 原山哲訳, 『資本主義のハビトゥス—アルジェリアの矛盾』藤原書店, 1993年.)
- 62 (1) 対象が自分に類似する内面性と身体性をもつ (トーテミズム), (2) 対象が自分と異なる内面性と身体性をもつ (類推主義), (3) ある対象が自分と類似する内面性と, 異なる身体性を持つ (アニミズム), (4) ある対象の内面性は自分と異なるが, 類似した身体性をもつ (自然主義). (Descola, Philippe, "Beyond Nature and Culture," *Proceedings of the British Academy*, 139: 137-155, 2006.)
- 63 庄司興吉, 『社会学の射程—ポストコロニアルな地球市民の社会学へ』東進堂, p.120, 2008年.
- 64 玉野井芳郎, 『エコノミーとエコロジー』みすず書房, 2002年.
- 65 新崎盛暉, 『新崎盛暉が説く構造的沖縄差別』高文研, 2012年.
- 66 Toddie, 「はじめまして」『新月新聞』0号, p.1, 2013年.
- 67 Toddie, 同上.
- 68 この点については須野瀬淳氏より示唆を受けた。ここに感謝したい。
- 69 安次嶺雪音, 「森で暮らそう!! (1)」『新月新聞』上掲, p.2.
- 70 伊佐郁子, 「大海の一滴」『新月新聞』同上, p.7.
- 71 森岡尚子, 「タカエクワッチー その1 種取りレシピ」『新月新聞』同上, p.3.
- 72 阿部上掲, p.73, 2011年.
- 73 音符を一種の言語構成上の要素として考察するならば, 音楽自体が一つの文法により構成された言説であるとする見方もあるだろう。しかしながらここではむしろ波動と内的連続性に注目したい。
- 74 Bay, Hakim, *T.A.Z.: The Temporary Autonomous Zone*, Autonomedia, 1991. (= 箕輪裕訳, 『T・A・Z——時的自律ゾーン』インパクト出版会, 1997年.)
- 75 Melucci, *op. cit.*, p.22.
- 76 新城郁夫, 「沖縄の傷という回路」『世界』824: 72-82, 2011年.

Writing Space of Social Movement from Interpretive Perspectives: A Case Study on Anti-Militarization Movement in Takae, Okinawa Island

MORI Keisuke *

Abstract

This paper aims to clarify the space of the direct action of an anti-US base construction sit-in movement in Takae, Okinawa, from the perspective of Social Movement Studies. Previous research tends to emphasize socio-political aspects of the social movements such as contentious politics, international relations, and political processes. In this paper on the contrary, by conveying the interpretive approaches of these studies, I argue how this space of sit-in emerges as the socio-cultural artifact of the actions of the participants. The object of this study is Takae district, which is located on the northeastern part of Okinawa Island. In 1996, the Japanese and US governments agreed with the reformation of the US bases located on Okinawa. According to this agreement, a northern half of the US Marine's North Training Area is to be returned to the Japanese Government. However, as a precondition for that, the new construction of helicopter landing zones should be built in the vicinity of Takae District. Despite the resident's strong criticism to this plan, the Japanese Government forced the start the building process in 2007. In order to countervail this undemocratic process and stop the construction, residents and supporters started sit-ins on July, 2007. I thus clarify how the spaces of sit-ins formulate a variety of discourses and meanings on the movement spaces.

Keywords

Social Movement, Space, Okinawa, US Military Base, Interpretive Approach, Culture

* Correspondence to: MORI Keisuke
Graduate School of Social Sciences (Doctoral student), Hitotsubashi University
2-1 Kunitachi Naka, Tokyo, 186-8601 Japan
E-Mail: sd111020@g.hit-u.ac.jp